血と涙で綴った証言

戦争

上巻

朝日新聞テーマ談話室・編

朝日ソノラマ

——血と涙で綴った証言——
戦　　争　（上巻）

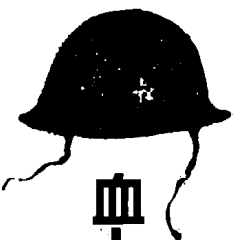
昭和62年7月31日　初版発行

編　者　朝日新聞テーマ談話室 ©1987
発行人　喜久村　繁　　定価1200円
印　刷　図書印刷株式会社
製　本　図書印刷株式会社
発行所　株式会社　朝日ソノラマ
〒104 東京都中央区銀座4—2—6
第二朝日ビル
電話03(563)6021～3　振替　東京2—40311

落丁本・乱丁本はおとりかえします。
ISBN4-257-03232-4

戦争

上巻



血と涙で綴った証言

朝日新聞テーマ談話室・編

朝日ソノラマ

後世に残す庶民のこえ

入江　徳郎

朝日新聞朝刊に「テーマ談話室・戦争」の連載がはじまってから、わたしはこの欄を、普通のスピードで読むことができなくなった。

読者から寄せられたいくつかの投書を、丹念に、真剣に読む。居ずまいを正して読むといった感じになる。連日ここにくりひろげられる戦争についての体験は生々しく、深刻で、読むものの胸をうつ。吐息をつかせ、考えさせる内容のものが多い。通りいっぺんに読みすごせるようなものではない。

ここにはかつての戦争に巻きこまれた国民のさまざまな声がある。ある人は、召集されて戦場に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

赴いたまま還らぬ肉親を嘆き、辛うじて生還した人は、悲惨を極めた戦場の実態を語る。

部下を見殺しにして、自分だけの安全を図った上官への怒りをこめた投書もあれば、責任を守り、部下の兵士をかばった将校の話も出てくる。

軍隊につきものだった古年次兵の暴行を受けて鼓膜を破られ、いまも障害に悩む人の手記もあれば、そのような暗さの中で、兵卒同士の友情をにじませた便りもある。

中国で、民家を焼き払い、確かな証拠もないのにスパイとして住民を殺した。命令とはいえ罪深いことをしたものだ。われわれは中国に甚大な被害を与えた加害者だったと永年の悔恨を告白しているのもあれば、飢餓の極、人肉さえ食いかねぬ地獄図絵、狂気の世界を想起して、やはり伝えておかねばと書いた短信もある。

兵だけではない。旧満州（中国東北地方）の開拓移民の悲惨な逃避行やB29の焼夷弾攻撃下の、広島長崎の原爆下の悪夢のような記録。徴用された職場のひどい実相、集団で疎開した学童の空腹とシラミ。いろんな角度からの戦争体験が寄せられている。血と涙で綴られたような欄「テーマ談話室・戦争」に、深い思いに誘われる読者は多い。

こうした企画はもっと早く欲しかった。しかし今でも遅すぎることはない。

昭和の戦争は日本歴史の上で最大の愚行、最大の悲惨事だ。この戦争に関して民衆の側からの証言を多数集めておくことは後世に大きな資料を残すことになる。

公式な記録や戦史ではうかがえぬ民衆の声が盛りこまれた巨大な碑（いしぶみ）となるだろう。

それはまた、戦争を深く反省し、再びかかる惨を起こさぬ教訓のモニュメントであり、非命にたおれた人びとへの供養ともなるだろう。

連載が一冊の本になった。この書の語りかけるものを、更に精読し、子や孫に貴重な書として残したいと思う。

昭和六十二年七月一日

（評論家）

目次

後世に残す庶民の声……入江徳郎　3
第一章　少年は馬のいななきを忘れない……11
第二章　ゲリラ刺殺、私の戦争は続く……119

第三章　叫びたくても叫べない女たち……257
第四章　ああ、銃口の前に立つ思いは……389
朝日新聞「テーマ談話室」より……514
執筆者索引　巻末
付録「アジア大陸、太平洋、インド洋一般図」

Ⅰ　本書は昭和六十一年七月十日から六十二年二月二十八日まで、朝日新聞（東京、西部、名古屋各本社と北海道支社発行）の朝刊4面に毎週三回掲載されたテーマ談話室「戦争」シリーズの投稿と、それに関連した解説記事を全部収録しました。

Ⅱ　第一章は七・八月分、第二章は九・十月分、第三章は十一・十二月分、第四章は一・二月分からなります。それぞれの章では、できるだけ項目を関連づけて配列してあります。

Ⅲ　新聞ではやむをえず省略した内容を一部復活したものもあります。また、新聞の鉛筆マークのコメントや引用文は※印を付して掲載しました。

Ⅳ　（　）内の日付は新聞に掲載した月日、年齢は新聞掲載当時のものです。

Ⅴ　巻末に執筆者索引をつけました。

Ⅵ　付録として昭和十九年当時の「アジア大陸、太平洋、インド洋方面一般図」をつけました。

Ⅶ　用語解説を下巻に掲載します。

戦

争

上卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装幀＝木幡朋介
写真＝朝日新聞社・調査部
同　　・出版写真部

第一章　少年は馬のいななきを忘れない

一

サイパンの兵士の本音と建前

兵隊が戦場で死ぬとき、いや自決するときといった方がいいかも知れません。そのとき「天皇陛下バンザーイ」というのはウソで、「お母ぁさん」や妻の名、あるいは子どもの名らしきものを呼ぶ、と一般にいわれてきました。しかしサイパン島生き残り組の一人（昔は生きている英霊といわれました）である私は、どちらもほんとうだと申し上げたいのです。ある兵隊は「お母ぁさん」であり、ある兵隊は確かに「天皇陛下バンザーイ」といって自決しました。

いま考えてみますと、集団などで「公式」に死ぬときは「天皇陛下バンザーイ」であり、洞くつの中で一人で死ぬような「非公式」の場合は、天皇陛下にしばられないといった方がいいのかも知れません。

私は中部太平洋方面艦隊司令部付（司令長官南雲忠一中将）で昭和十九年七月七日、サイパン島最後の総攻撃に参加して負傷、行動の自由を失いました。日米両軍のおびただしい死傷者が横たわる海岸でした。私の周辺に倒れていた数人の日本兵は、集団自決するつもりらしくいざり寄ってきました。そのうちの一人が手りゅう弾を右手に持って高くあげ「そっちの海軍さんもいっしょに行き（死に）ませんか」と私に声をかけてくれました。

私は「手りゅう弾は持っていますからお先にどうぞ」といいました。「天皇陛下バンザーイ」と手りゅう弾の破裂が同時でした。数名の兵士はバラバラになって一気に吹きとんでしまいましたが、そのむごたらしさに私は息をのみました。

私も右太ももに機銃弾をうけ行動の自由を失ってい

ます。負けいくさで行動の自由を失うことは死を意味します。このむごたらしさをみて私は出血多量による「自然死」を考えました。結局人事不省のまま捕虜となったのですが……。

日本の軍隊には死ですらもタテマエとホンネがあったのです。防衛庁の発表によるとサイパン戦での日本軍の戦死者四万一千人。私はその半分は、勝ちいくさなら死ななくてすむ「自決」だと思っています。（7月10日）

水戸市　野田　光春　68　無職

※　昭和六十一年七月十日付紙面から連載は始まった。その日から四十一年前の、昭和二十年のその日、関東地方は終日、米軍機の制圧下にあった。本土沖に接近したハルゼー提督指揮の米第三艦隊から発進した艦載機約千二百機は、早朝から夕方まで六波に分かれ主として飛行場を攻撃したが、そのほか地上に動くものを見れば無差別に機銃掃射を加えたりした。日本側は本土決戦に備えて航空戦力を温存するため、地上火器による反撃だけ。攻撃を受けたのは東京、千葉、埼玉、長野、山梨、静岡にわたる。この十日、別にマリアナ基地のB29六十機は未明の仙台を夜間爆撃。硫黄島のP51戦闘機百五十機は大阪付近を、沖縄基地の戦爆連合百四十機は熊本、八代などを攻撃した。（米第三艦隊はその後、北海道に至るまで全土を襲い室蘭、釜石、日立、水戸、千葉県白浜には艦砲射撃を加えるに至る）

高見順はこの日、終日書斎にあって生死の問題を考え（『敗戦日記』）、徳川夢声は、初め息をひそめていた都民もやがて必要な用事を空襲警報下に足すようになった姿を書き残している（『夢声戦争日記』）。

ヤマトタケルノミコト作戦

「中隊長殿がお呼びです」。隊長当番が連絡してきた。事務室要員だった私はすぐ仕事をやめ隊長室に行った。

「中牟田兵長、お前、おおごとのできたぞ」

いきなり言われて「どんなおおごとでありますか」と問い返した私は、次の彼の言葉に心底びっくり仰天した。

「まあ、よく聞け」と彼は言う。ここは米軍上陸必至といわれた宮崎県下の小さな町。隊長の話はこうだ。

師団の隷下部隊から女装の似合いそうな古参兵を選んで斬込隊を編成せよ。米軍との戦闘が始まったら女装して敵の上級将校幕舎に近づき、進んで捕虜となって隠し持った手りゅう弾で敵もろとも爆死せよ。まさにヤマトタケルノミコト群の一人に私が選ばれているのだという。

「冗談じゃありません。隊長殿もご存知のように、自分はシナで四年半も戦争に参加してきた兵隊です。二度目の召集です。しかしこんどは覚悟を決めております。入隊いらい隊長殿には特にかわいがっていただいております。死ぬなら兵隊として、隊長殿のおそばで死にたくあります。女装で死ぬなど、いやです。おことわりいたします」

「そう来ると思うた。おれもこんな作戦には反対だ」

私の抗弁に、銀行員出身の中年の中隊長はおだやかだった。

実はこの二週間ほど前、警備地区の民家に分宿させてもらっているお礼にと、付近一帯の住民を招いて町の広場で連隊主催の演芸会が開かれた。新聞記者出身で演劇や映画には特別の関心をもっていた私は、同好の士を集め俗受けをねらって「股旅もの」のシナリオを書き、自らも女役で出演しようとけいこを重ねていた。

さて当日。舞台で芝居をしながら観客の反応をみていると、私を本職の女優と思っているらしいのがよく分かった。結局、連隊長賞を授与されるほどの爆発的な人気と拍手を得て大成功。これが師団のお偉方たちに女装斬込隊のヒントになったらしい。貧すりゃ鈍する――終戦一カ月半前の帝国陸軍の姿である。（7月12日）

筑紫野市　中牟田　勝三郎　72　無職

※　中牟田さんのいう本土決戦――西日本防衛のため第二総軍（司令官畑俊六元帥）が編成された。河辺参謀次長の現地視察報告。「敵ヲ恐ルル気分一部ニ於テアリ……先ヅ如何ニシテ敵火力ノ損害ヲ避ケントスルカ、コレヲ先決事項トシテ考フル風ニ頭ガ動イテ居ル様ニ思ハル……訓練、各兵団共ニ甚ダ未熟……築城、総括的ニ見テ二乃至三割完成トイフベキカ……通信、甚ダ不備ナリト認メラル」。昭和二十年七月初めの九州地区の防衛状況だ。

バシー海峡・分かれた生と死

昭和十九年七月、われわれ召集兵は横須賀武山の宿舎を出発し、大船から東海道線で下関へ。数日休養のち岸壁の大型船に乗船したが、船内の事故で門司から中型のしあとる丸（五、七〇〇トン）に乗り換えた。兵員兵器を満載、わが中隊は上甲板に位置した。

敵潜の横行する海を船団はジグザク航行した。台湾南部高雄港を出航後、港外から敵潜の追跡が始まった。午前十時ごろ十六隻の船団の左側にいたしあとる丸に魚雷二発命中、船内の石炭粉と共に兵隊数名が海に吹き上げられた。続いて船体は大傾斜が起こり、甲板上に積んである大発（大型発動機艇）二隻に乗った兵員は乗船したまま海中に落下した。同時にしあとる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com